

本学における介護実習評価の現状と今後の課題  
～施設実習評価と自己評価の比較から～

須 江 裕 子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第63号抜刷）

## 本学における介護実習評価の現状と今後の課題 ～施設実習評価と自己評価の比較から～

Comparison of the Evaluation of Facility Training and Trainees' Self-Evaluation:  
Current Situation and Problems in the Care Training Evaluation System at Mimasaka University

須江裕子

キーワード：介護福祉士、介護実習評価、自己評価、実習指導

### はじめに

介護福祉士養成課程において、介護実習（以下、実習とする）は学内で学習した専門的知識や技術を具体的に体得して実行していく能力をつけることを目的に行われる。実習における評価は、学生が実践したことを振り返る機会となり、自己目標に対する達成度を確認し、次回実習に向けての自己課題を明確にするなど自己を客観的に見つめる働きがある。

松岡らは学生の実習意欲について「能力を正当に評価されたとき促進されることがわかった」<sup>i</sup>と指摘している。また、工藤らは「実習評価は施設評価、学生、実習担当教員が共に実習期間を振り返り、対話し相互理解を深めるためのツールとして活用すべきものである」<sup>ii</sup>と述べている。これらの報告から、実習評価は学生の意欲向上のために活用できる有用な資料であると認識できる。

筆者は本学において、実習後の指導を担当しているが、施設実習指導者による実習評価（以下、施設実習評価とする）と学生による自己評価（以下、自己評価）を元に、学生と個別に面談を行い、実習の振り返りを行っている。その中で、施設実習評価と自己評価の内容について差異が生じることが少なくない。ここで生じる差によって、学生は自身が認められなかったことへの過度の落ち込みや、実習指導者や実習施設に対して批判的な感情を持つなど評価を適切に受け止められ

ないこともある。各実習施設における評価を標準化することは困難であることから、筆者はフィードバックにあたっては評価点に固執せず指導者による所感に記述された内容を学生が適切に受け止められるということを重要視している。

本研究では、指導者と学生間の評価の差異がどこに生じているかを明らかにし、実習後の指導に際して実習評価をより有効に活用していくことを目的とする。

### 本学の実習カリキュラム及び実習評価方法

本学の実習カリキュラムを表1に示した。実習ごとに、施設実習評価と自己評価を実施している。本研究では、実習評価を比較検討するために長期間継続して実習を行う実習区分Ⅱに該当する実習Ⅱ①②を対象とした（以下実習Ⅱ①を実習A、実習Ⅱ②を実習Bとする）。

実習評価にあたっては、平成9年度版介護福祉実習指導マニュアル（平成9年、日本介護福祉士養成施設協会）を参考にして作成した本学独自の評価表を用いた。なお、実習A及びBは共通の評価表（表2）を使用している。

施設実習評価と自己評価は同一の評価表を用いた。評価項目は①実習態度、②コミュニケーション、③技術、④実習記録、⑤チームワーク、⑥資質の6つを挙げ、各項目について5段階評価とし、項目ごとの所感

表1. 実習カリキュラム（1年課程）

区分	期間（時期）	実習先種別
実習Ⅰ ①	3日間 （6月第2週）	特別養護老人ホーム・ 介護老人保健施設
実習Ⅰ ②	2日間 （6月第2週）	グループホーム・小規模 多機能型居宅支援事業
実習Ⅰ ③	3日間 （8月第1週）	訪問介護事業
実習Ⅱ ① 〈A〉	12日間 （8月第4週から）	特別養護老人ホーム・ 介護老人保健施設・障害 者支援施設・救護施設
実習Ⅱ ② 〈B〉	15日間 （11月第4週から）	特別養護老人ホーム・ 介護老人保健施設・障害 者支援施設・救護施設

欄を設けた。また、総合評価についても同様に5段階評価及び、実習全体に対する所感欄を設けた。

### 研究方法

1. 対象：専攻科15期生（平成28年度卒）  
21名 うち男子5名、女子16名

2. 方法：

- 1) 平成28年度介護実習A・Bにおける施設実習評価表及び自己評価表の比較分析（実習A・Bの期間及び実習先は表1を参照）
- 2) 実習評価表に対する学生の意識調査  
全課程修了した2月10日実施。集合調査法による自記式質問紙調査（表3）。学生には本研究の主旨等について口頭で説明し、調査協力について了解を得た。21名中20名より回答が得られた（回収率95%）

表2. 実習評価表

評価項目	着眼点	評価点	所感
実習態度	積極性、責任感、注意力、健康管理はできていたか		
コミュニケーション	対象者との接し方、話し方、きき方等について		
技術	介護に必要な技術の修得ができたか（実習Bでは修得し応用できたか）		
実習記録	確実性と適切な表現力、提出期日は守れたか		
チームワーク	協調性、役割分担の認識があったかどうか		
資質	専門職としての自覚と適性について		
総合評価	1 かなり努力が必要 2 努力が必要 3 普通 4 良い 5 非常に良い 今回の実習で努力がみられた点、又今後の課題等できるだけ具体的にご記入下さい		

### 結果及び考察

- 1) 平成28年度介護実習A・Bにおける施設実習評価表及び自己評価表の比較分析  
施設実習評価及び自己評価において、一番多く選択した評価段階を比較すると、実習Aにおける「総合」、実習Bにおける「実習態度」・「コミュニケーション」・「総合」の項目を除いては3が最も多かった。図1から図4の縦軸は評価段階を意味し、横軸は評価した人数を意味する。

まず、実習Aにおける「総合」に関する評価（図1）は、施設実習評価は1及び2はなく、3及び4で20名（95.2%）と高い評価傾向が見られた。実習施設では、介護福祉士養成校の他に高校生、社会人、各種

研修生など多様な形態の実習を受け入れている。そのような実習環境にあって、本学学生は専攻科入学前において、保育実習や幼稚園実習等の実習経験は豊富であるため総合的な視点においては高い評価につながったと考えられる。自己評価では未記入が10名(47.6%)と最も多かった。このことから学生にとって自己判断しづらい項目であることが分かった。また、評価表の中で見落としやすい配置であることも原因と考えられる。学生への説明の周知徹底や配置などについて今後の改善が必要である。

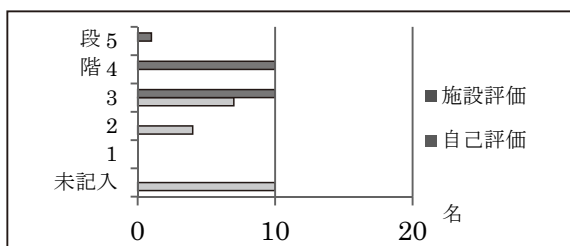


図1. 実習Aにおける「総合」に関する評価の比較

次に、実習Bにおける「実習態度」に関する評価(図2)は、施設実習評価は3が15名(71.4%)であるのに対し、自己評価では4が13名(61.9%)と最も多かった。これは、長期間実習は2度目であり、学生は1度目の実習での評価を受けて、実習態度を改善したつもりであっても、最終実習となる場面において指導者が求めるレベルが底上げされるケースや、学生の実習慣れから緊張感が失われることなどが要因と考えられる。

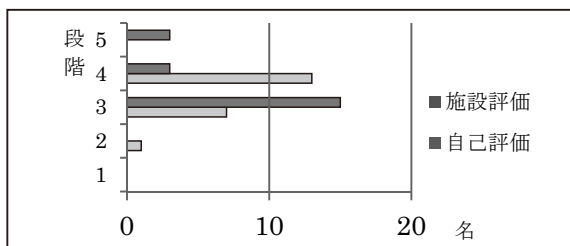


図2. 実習Bにおける「実習態度」に関する評価の比較

施設実習評価では4が8名(38.1%)、次に3が7名(33.3%)と多く、5も3名(14.3%)あった。自己評価では3が17名(80.9%)あり、極めて多かった。コミュニケーションにおいては、自分が感じているよりも、指導者から高い評価が得られている。この点については、「指導者の方が評価が高いということは、学生に自信が無いということを示す」<sup>3)</sup>という指摘もあるように、自信の無い項目において自己評価が低く出たものと推察する。

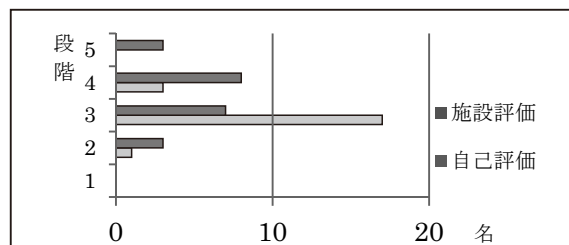


図3. 実習Bにおける「コミュニケーション」に関する評価の比較

実習Bにおける「総合」に関する評価(図4)は、施設実習評価では全て3以上の評価で、自己評価には見られなかった5(9.5%)の評価も含め高い傾向が見られた。指導者の総合的な視点からは、養成課程において最終となる実習Bにおいて標準以上のレベルであったと認められたと捉えられる。

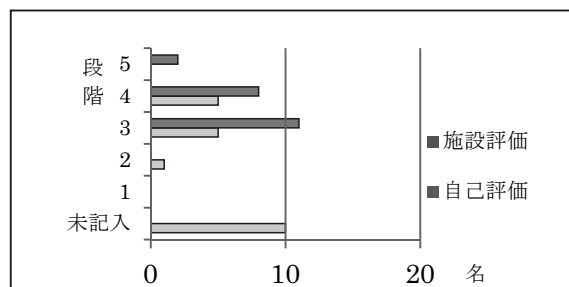


図4. 実習Bにおける「総合」に関する評価の比較

次に、施設実習評価と自己評価の平均点の変化を実習A及び実習Bでそれぞれ比較した(表3・4)。その際、未記入の項目のあった「資質」と「総合」は除いた。

「コミュニケーション」に関する評価(図3)は、

表3. 実習Aにおける施設実習評価と自己評価の平均値

評価項目	施設評価	差	自己評価
実習態度	3.5	>(0.4)	3.1
コミュニケーション	3.6	>(0.5)	3.1
技術	3.3	>(0.6)	2.7
実習記録	3.2	>(0.2)	3
チームワーク	3.4	>(0.6)	2.8
平均	3.4	>(0.5)	2.9

表4. 実習Bにおける施設実習評価と自己評価の平均値

評価項目	施設評価	差	自己評価
実習態度	3.4	<(0.2)	3.6
コミュニケーション	3.5	>(0.4)	3.1
技術	3.3	>(0.3)	3
実習記録	3.4	>(0.2)	3.2
チームワーク	3.5	>(0.4)	3.1
平均	3.4	>(0.2)	3.2

(単位：点)

実習Aでは施設実習評価の平均3.4点に対して自己評価の平均は2.9点で施設実習評価の方が0.5点上回った。実習Bにおいても平均点は施設実習評価の方が自己評価を0.2点上回った。項目別に見ると、実習Bにおける実習態度を除いては施設実習評価の平均点が自己評価よりも高かった。また、実習Aと実習Bにおける施設評価の変化を見ると、平均点は共に3.4点と同値を示し、自己評価では2.9点から0.3点上昇し3.2点となった。実習A及びBは、それぞれ異なる施設へ配属しており、学生・指導者両者にとっていずれも初めての実習先での経験に対する評価となる。また、指導者が異なるため、評価者も異なり、単純に比較することは難しい。しかしながら、自己評価では、コミュニ

ケーションを除く全ての項目において実習Aに比べ実習Bの評価の平均点が上昇している。特に実習態度では0.5点の上昇が見られた。実習態度の項目を個々の学生の実習Aと実習Bの変化で見ると1点上昇が9名(42.9%)、2点上昇が1名(4.8%)、合わせて10名(47.6%)がプラスに変化した。これは学生に、自己成長したという自覚が表れたものと捉えられる。コミュニケーションは他の項目と比べてスコアは低くなく、実習A・B共に平均は3.1点であるが、コミュニケーションの項目を個々の学生の変化で見ると1点上昇が5名(23.8%)、1点下降が4名(19%)、増減なしが12名(57.1%)であった。これらから、コミュニケーションは学生にとってステップアップには至らず課題の残る項目として捉えられていると考えられる。

## 2) 実習評価表に対する学生の意識調査

学生に対するアンケート調査によると、「実習中に施設からの実習評価のことが気になるか」の問いについては、「とても気になる」8名(40%)、「少し気になる」7名(35%)を、合わせて15名(75%)の学生が実習中に評価されることを意識していることが分かった。

(図5)

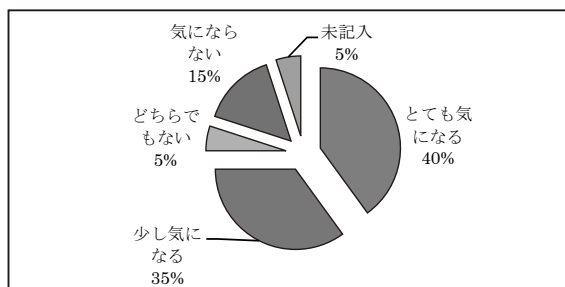


図5. 評価が気になるか

評価結果をみることについて、「少し怖い」12名(60%)、「怖い」3名(15%)を合わせて15名(75%)の学生が評価を見ることに怖さを感じている。また、評価が高かった場合には、「嬉しい」12名(60%)、「とても嬉しい」7名(35%)を合わせて19名(95%)の学生が評価の高いことに対して率直に喜んでいる。コ

表3. 実習評価表に関するアンケート調査項目

1. 実習中に施設からの実習評価のことが気になりますか  
(とても気になる・少し気になる・どちらでもない・気にならない)
2. 実習後、施設からの実習評価の結果についてどのように感じますか。該当する項目に○をつけて下さい。  
複数回答でもよい。(見るのが怖い・見るのが少し怖い・見るのが楽しみ・みるのがとても楽しみ・どちらでもない)
3. 施設からの実習評価が、自分が思ったよりも高かった場合はどのように感じますか。  
(とても嬉しい・嬉しい・嬉しくない・どちらでもない)
4. 施設からの実習評価のコメントの内容について  
(今後の参考にしたい・少しは参考にする・あまり参考にしない・どちらでもない)
5. 専攻科の介護実習の中で、実習評価で嬉しく思ったことがあればその内容を具体的に教えてください。
6. 専攻科の介護実習の中で、実習評価で嫌な気分になったことがあればその内容を具体的に教えてください。
7. 実習評価についての要望や意見があれば自由に記述してください。

メントについては16名(80%)が「参考にしたい」と答えるが、「少しは参考にする」が2名(10%)、未記入が2名(10%)あった。たとえ評価者により評価基準が一定していなくとも、コメントは評価者の意図が素直に受け入れられるよう、フィードバックでは細心の注意を払うように心掛けているが、「少しは参考にする」・未記入の回答があることから更に注意深く個別指導を行う必要がある。

また、自由記述より、「良い悪いに関わらずしっかり書いてあったらちゃんと見てくれていたのだと嬉しく思う」「全然コメントが無いと嫌な気分」「一言でも良いのでコメントは欲しい」とあることから、コメントは学生にとって、重要な関心事項であることが確認された。

#### まとめ(今後の課題)

指導者と学生間の評価の差異が生じた際には、特に指導者の記述した所感の内容について、学生の自己理解を深め、次回に続く実習への意欲につなげられるようなフィードバックを行うよう努めていきたい。指導者の評価の意図を汲み取るためにも、指導者と教員のコミュニケーションも更に深めていく必要があると考

える。

実習評価表の様式については、介護福祉実習指導マニュアルでは平成9年度版介護福祉実習指導マニュアルから平成13年度版に改訂されたが、本学専攻科では開設当初より同じ実習評価表を用いている。また、「資質」・「総合評価」の項目への未記入があったことから、今後この2つの項目についてはマニュアルに準じながら変更を検討していきたい。

更に、施設実習指導者が、戸惑うことなく実習評価の記入ができる評価方法や様式について今後、実習指導者と意見交換を行い検討していきたい。

多くの学生は、実習に対して不安と期待を抱きながら実習期間を過ごす。自らの実習を振り返ることにより、実習を重ねるごとに不安を自信に変え、介護福祉士を目指すための期待感を継続していけるよう、実習評価表を有効に活用していきたい。

#### 引用・参考文献

<sup>i</sup> 松岡緑他「臨床実習評価が学生の实習意欲に及ぼす影響」『第22回看護教育学会集録集 看護教育』、日本看護協会出版会、1991年、p 70

<sup>ii</sup> 工藤雄行、山口かおる「本学における介護実習評価

の特徴と課題－実習施設評価と学生自己評価の比較  
を通して－『弘前医療福祉大学短期大学部紀要』第  
3号、2015年、p 95－102

<sup>iii</sup>山口かおる「実習指導者の評価と学生の自己評価の  
比較」『秋田桂城短期大学紀要』第18号、2005年、  
p 25－33